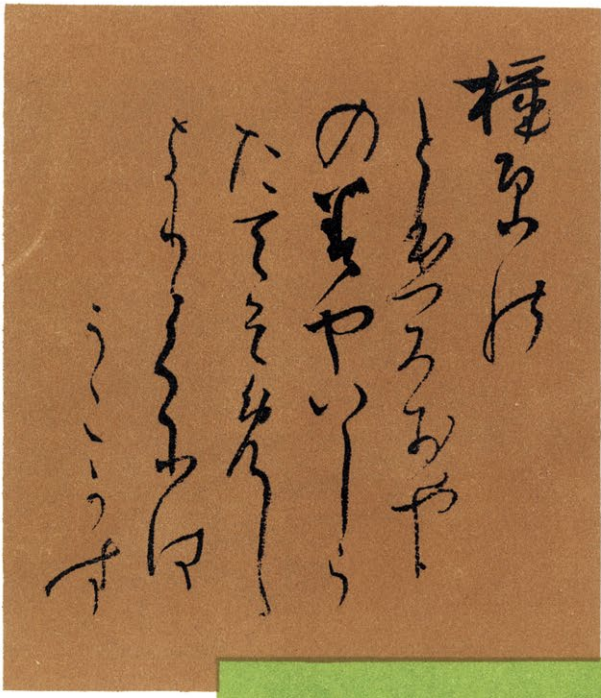
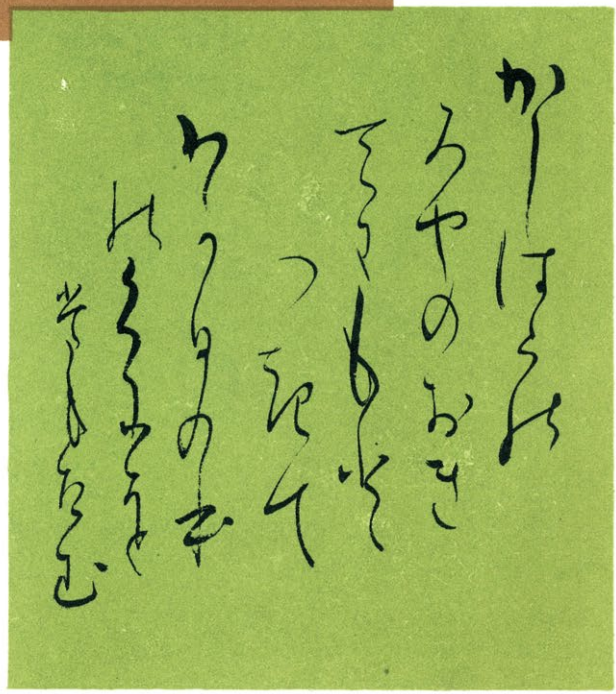
橿原の遠祖

橿原神宮司 苑田茂丸著

© 2016 kashiharajingu





明治天皇御製

© 2016 kashiharajingu

久米舞之圖

© 2016 kashiharajingu

靈鵄大錦旛之圖

萬歲旛之圖

© 2016 kashiharajingu

金鵄勳章之圖

裏

表

國勢調査章之圖

© 2016 kashiharajingu

橿原の遠祖　目次

はしがき……三
一　高天原と日向三代……七
二　遷都の理由……一一
三　御巡幸の順路……一四
一　高島宮まで御東遷……一四
二　高島宮より御東征……四九
四　皇軍の迂回……七一
五　荒坂津上陸……八一
六　兄猾討伐……一〇〇
七　吉野の御巡幸……一〇七

© 2016 kashiharajingu

八　平國祈願……一一三
九　八十梟帥討伐……一三八
一〇　磯城彦討伐……一三五
一一　長髄彦討伐……一四一
一二　殘賊の討伐……一五二
一三　戰後の地名……一五八
一四　奠都の詔……一六三
一五　論功行賞……一八一
一六　立　后……一九四
一七　橿原宮御卽位……二〇〇
一八　宮中祭祀……二一四
一九　鳥見山行幸……二三一
二〇　開拓と殖產……二三五

© 2016 kashiharajingu

二一　國の名……二三
二二　立太子……二三六
二三　崩　御……二三七
二四　橿原神宮創建……二四五
一　宮阯湮滅の理由……二四五
二　宮阯顯彰の機運……二四六
三　祭日暦面に記載せざる理由……二五〇
四　第一回宮域規模擴張……二五八
五　第二回宮域整備境内擴張事業……二五九

© 2016 kashiharajingu

圖版目次

巻頭圖版

明治天皇御製
橿原神宮御社殿全景
橿原神宮御本殿と幣殿・南御門
神武天皇御東遷御東征の御道筋要圖
久米舞之圖
神武天皇平國祈願後の大戰圖
萬歳旛之圖、靈鵄大錦旛之圖
金鵄勳章之圖、國勢調査章之圖
橿原神宮境内配置圖

寫眞網版

高千穗峰……六
霧島神宮、新田神社……七

© 2016 kashiharajingu

鵜戸神宮、鹿兒島神宮……一〇
宮崎神宮、王子原、玉依姫命產場石……一一
皇宮神社、立磐神社御腰掛石、七ッ八重並一ッ八重、美美津港……一八
御鉾神社、綱取石、神井、細島港……一九
早吸日女神社、足一ッ騰宮舊阯、竈門神社、寶滿山頂玉依姫命神陵……二六
英彥山神社、宗像神社、住吉神社、岡ノ縣西部地方……二七
高倉神社、神木綾杉、高倉神社古圖、岡湊神社……四二
多家神社、埃宮神社、高島の遠望、神木榊、孔子手植檜……四三
生國魂神社、生國魂神社古圖……六六
枚岡神社、神木いぶき……六七
竈山神社、竈山御墓、男神社……七四
濱の宮、神倉神社、神倉山天磐盾……七五
大洗磯前神社、酒列磯前神社、石上神宮……九〇
態野荒坂津、室古神社、阿古師神社、菟田大殿、菟田高城……九一
菟田血原、井光神社、吉野川阿太の流域、高倉山……一〇六

© 2016 kashiharajingu

望軍碑、高角神社、國見嶽、女坂、男坂、墨坂……一〇七
天香山、菟田川の清流、菟田朝原と村社丹生神社、手抉・嚴瓮・平瓮……一三三
頭椎の太刀、忍坂道、伊那佐山……一三三
物部神社、弓塚、波哆丘岬……一五四
賀茂御祖神社、臍見長柄丘岬、和珥坂……一五五
國の奥區……一六六
畝傍山天正古圖、畝傍山嶺の橿……一六七
鳥坂神社、築坂の宅阯、久米御縣神社、八咫烏神社……一八六
狭井坐大神荒魂神社、玉造神社、鳥見山の中腹靈畤阯、曲玉……一八七
大神神社、忌部神社……二一八
安房神社、安房神社縁起、天太玉命神社……二一九
忌部の故地、千塚山、忌部山……二三八
神武天皇畝傍山東北陵……二三九
神武天皇御記、神武天皇御記の一部……二五〇
神宮本暦……二五一

© 2016 kashiharajingu

橿原の遠祖

© 2016 kashiharajingu

はしがき

去る大正十年は、神武天皇が紀元元年、始めて橿原の宮に御即位になつた辛酉の年に當りましたのと、又橿原神宮を創めて御建てになりましてから、恰度三十周年に當りましたので「はじめの天皇」と題する記念出版をいたしました。それに又本年は、神武天皇が此の橿原の宮に御即位になつてから、二千六百年といふ芽出度い年に當りますのと、なほ又橿原神宮を御建てになつてから五十周年にも當りますので、今回は明治天皇の御製の初めの御句を拜用しまして「かしはらのとほつみおや」と題して、再び記念出版をすることゝいたしました。

さて、お話しいたします筋書は、大體古事記と日本書紀とを本といたしまして、それに古語拾遺などをも參考といたしました上に、更に各地方に遺つてゐる御聖蹟に關する口碑傳説をも書き加へて、なるべく平易に、誰にも解り易いやうに書いたものであります。

© 2016 kashiharajingu

古事記は、人皇第四十代天武天皇が、天地の初めから天津日嗣の御代々の有様を、其の當時、非常に記憶のよい稗田阿禮といふ者に暗記せしめられたのを、人皇第四十三代元明天皇が、和銅四年(紀元千三百七十一年)九月に、太安麻呂に勅して、稗田阿禮の暗記した勅語の舊辭を記述せしめられ、翌年正月に功成つて上つられたもので、上卷は神代、中卷は人皇第一代の神武天皇から人皇第十五代應神天皇まで、下卷は人皇第十六代仁德天皇から人皇第三十三代推古天皇まで、すべて三卷であります。なほ此の古事記は、萬葉假名で書かれた口語體で、なか〳〵讀みにくい古代の文章であります。

日本書紀は、元明天皇の御代に、天武天皇の第三皇子一品舍人親王及び太安麻呂に勅せられて、撰修せしめられたもので、次の人皇第四十四代元正天皇の養老四年(紀元千三百八十年)五月に出來上つて、上奏せられました。卷の數は、系圖一卷を添へて三十一卷であります。神代から人皇第四十一代持統天皇までの事を誌されてあります。前の古事記は、單に稗田阿禮が暗記してゐた物語を筆記したもので、國史としてはやゝ不體裁でありますが、此の日本書紀は漢文で書かれてゐて、正史と

© 2016 kashiharajingu

しての體裁を備へてゐます。此の書物の巻の首は、神代紀であります。此の巻に於きまして、我が皇室の本源を説き、肇國の由來を明かにしてをります。其の眼目となるところは、かの最も尊き天壤無窮の神勅であります。次に神武天皇紀に於きまして、橿原の宮に都を御奠めになる時の詔によつて、なほ一層建國の精神を明かにせられて、國を治める政治の御方針を御示しになり、皇室と國民との關係が如何なるものであるか、又國家の理想と國民の信念とが、何處にあるかを御述べになつてをられます。それで、明治天皇の御製に、

かしはらの宮の掟にもとづきて
　わが日の本の國をたもたむ

と御詠み遊ばされた大御心のやうに、此の日本書紀の神武天皇紀は、御歴代天皇の御聖德の源泉とも申すべきものであり、これは又、此のありがたき御聖德に對し奉り、國民が如何にして皇室を奉戴してゐるかといふ國民精神の大本でありますから、今紀元二千六百年を迎へ奉るにあたりまして、我が國民は齊しく、此の神武天皇紀をよく讀みわけて、「皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ、德ヲ樹ツルコト深厚ナリ。」と

© 2016 kashiharajingu

仰せられました明治天皇の教育勅語の大御心を戴きまして、此の際、なほ一層建國精神を宣揚し、天業恢弘の聖業を扶翼し奉らなければならないと存ずるのであります。

なほ古事記及び日本書紀の二書の外に參考といたしました古語拾遺といふ書物は、齋部廣成が著したものであります。此の人の遠祖天太玉命は、天兒屋根命と共に天津神籬を持ち降つて、皇孫の爲に齋き祀つて、永く朝廷の祭祀に奉仕した家柄であります。それで、朝廷から齋部氏に傳へられてゐる舊説を書いて差出すやうにとの仰せを蒙つたので、人皇第五十二代平城天皇の大同二年(紀元千四百六十七年)二月十三日に進獻したものであります。其の年代は、古事記よりは九十六年の後、日本書紀よりは八十八年の後に出來たものでありますが、齋部氏は天太玉命以來、朝廷の御祭祀に奉仕してゐる由緒正しい家柄でありますから、此の書は古事記・日本書紀の二書に次ぐ大切な書物であります。

© 2016 kashiharajingu

峰　穂　千　高

© 2016 kashiharajingu

座鎭村島霧郡良姶國隅大　　宮神島霧大社幣官
尊杵瓊瓊火彥高日津天石饒國石饒天　神祭
日五十月九　日祭

座鎭町内川郡摩薩國摩薩　社神田新社中幣國
日五十月九　日祭　　命杵邇邇　神祭

© 2016 kashiharajingu